

---

# ドリームジャーニー

卯沢 孔輔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドリームジャーニー

### 【Nコード】

N2666L

### 【作者名】

卯沢 孔輔

### 【あらすじ】

なんとなく人生を過ごしている直己の自分探しがよく分からない展開で始まる。

## 直己と謎のおっさん

なんて理不尽な世の中だ。直己はそう思った。

直己がこれまでに掲げた夢。100マイルの速球を投げ込むメジャーリーグのエース、10万人の観衆を一つにするミュージシャン、生涯無配のチャンピオン。けど結局はそれらに打ち込む財力が家庭にはなく、野球は中学生まで、ミュージシャンもファイターもテレビの中の人達だった。

そんな直己も大学4年生。まじめにやれば就職できないことはない2流大学の理学部に通い、なんとなく就職活動をしていた。ただ、なんとなくなので、どこの会社の目にも留まらない。「ああ、ここかな」と思った唯一最終選考まで残った会社も、当たり障りのない面接の未敗退。結局自分は何がしたいのか分からないまま、またなんとなく就職活動と学校生活の往復を繰り返す毎日だった。

そんなぼんやりした直己の直感が言っているのは

「俺は、たぶん、サラリーマンではない気がする。」

という言ってしまうえば現実逃避。じゃあ何がしたいのって親に聞かれても

「んー、わからない。」

としか言いようがない。だって日々なんとなくすごしてるんだもん。そんな直己の口癖は

「刺激が欲しい。」

何事も受身になっっているのにそんなこと言っただろうのか。

ある日の帰り道、好きなラーメン屋さんで濃ゆい豚骨魚介系のラーメンを食べ終え、歩いていると見知らぬおっさんが行く手を阻むべく立ちはだかっている。でも、直己の家はそこを通らねば帰れない。邪魔だ。果てしなく邪魔なのだ。

「すみません、どいてくれませんか。」

直己が言うつと、

「君、私が誰だか聞かないのかね。」

とおっさんが言うもんだから、

「いや、知らないおっさんに興味はないっす。」

と直己は言った。するとそのおっさんは

「君、毎日なんとなくすごして、何がしたいのかわからない、うーん、例えて言うなら駄目な大学4年生な顔してるよ。」

というので、

「なんなんすか、別にいいじゃないですか。いいからどいてくださいよ。」

と直己が言つと、おっさんは、

「質問タイム！」

と威勢良く始めたのである。

「第一問、君の今一番好きなスポーツ選手は？」

聞かれた直己はうんざりしながらも、答えればさっさと終わるだろうと思ひ、

「マニー・パツキヤオ」

と答えるとおっさんはメモを取りながら、

「第二問、君の好きなラーメン屋さんは？」

「中華そば田み戸。」

「第三問、一億円持ってます。どうする。」

「子供3人育てるために貯金します。」

一連の会話の後、おっさんは言った。

「君は5階級制覇したい上に、ネット上でも一番と噂されるラーメン屋をこよなく愛し、結婚できるかわかりもしないくせに、子供3人つくっちゃってる、うん、いわば最強幻想を抱いてやまないロマンチストですね。」

思わず直己は、

「ドラクエ？の性格決めるやつかよ……。」  
とつぶやき、

「もついいっすよね。」

とおっさんを突破しようとしたその瞬間、

「イーツツツシヨウターイム！」

とおっさんが叫びだした。その瞬間、直己の目の前は真っ暗になり、

「ポケモンで全滅したときかよ……。」

とつぶやきながら気を失ったのだった。

## 直江と謎のおっさん（後書き）

よかったですらひどいですけど感想ください。

## いきなりのゴング

目を覚ました直己。なぜか上半身裸でリングの上にいる。向こうサイドには見たことのある顔。見れば見るほどマニー・パツキヤオである。直己が頬つぺたをつねった瞬間、あのおっさんがリングサイドから話しかけてきた。

「夢っばいけど夢じゃないよ。君は今からマニー・パツキヤオと戦うんだ。ここはラスベガスね。」

直己は驚いた顔をしながら、

「はあっ!?!」

と一言だけ言うと、

「ファイ!!!」

とレフェリーは試合を始めてしまった。おっさんは、

「さあ行け行けい。」

とだけいい、なんとアジアの英雄マニー・パツキヤオと冴えない大学生直己のなんと morphology がたい世紀の凡戦の火蓋が切って落とされた。

マニー・パツキヤオはアジア人初のボクシング5階級制覇チャンピオンにして、フライ級からウェルター級くらいまで階級を上げたので事実上の7階級制覇とか9階級制覇と言われ、現在世界で最も強いボクサーと言われている一人だ。そのパンチを出し続けて相手を圧倒するスタイルが直己は好きなのだ。

「か、敵うわけないだろお!」

と直己が叫ぶと早速パツキヤオは猛攻に出る。上下に打ち分け手が止まらない。直己はこれまで負ったどんな大怪我よりも痛い思いをしていた。倒れたくても倒れられない。パンチが痛すぎて気を失いたくても失えない。そんな直己を支えていたのは「もし倒せたら俺すごいよね。」という、叶わぬ願いをとまなつた下心だった。レフェリーは笑いながらサンドバッグ状態の直己を見つめる。そのまま

袋叩きにされること12ラウンド。もちろん大差の判定負け。しかし、その後おっさんから信じられない一言が発せられた。

「次行ってみよう。」

直己はボロボロの体をいたわりながら、

「ドリフかよ……。」

とつぶやいた。

次とはそもそも何なのか。パツキヤオが去ったリングに上ってきたのは、60億分の1の男、エメリヤーエンコ・ヒョードルだった。いつの間にか両手につけられたボクシンググローブはオープンフィンガーグローブに付け替えられ、体中を支配していた痛みは引いていた。しかし直己はやはり、

「いや、無理でしょ、ねえ！皇帝陛下に敵うわけないでしょ……！」

と、もはやセコンドと化したおっさんに言ったが、おっさんは嬉しそうに、

「行け行けい。」

と言い出し、直己は、

「ちょ、ちょ、まっ、おい……！」

というも虚しく、レフェリーは、

「ファイ……！」

というもんだから、冴えない大学生直己と人類最強の男ヒョードルとの世紀の凡戦その2がはじまった。ヒョードルのパンチはパツキヤオよりも痛かった。PRIDE以降、無敗をひた走るその男の猛攻に直己は悶絶した。しかし痛くて気を失えない。レフェリーは笑って見ている。悪夢のような3ラウンドを終え、直己はとても家に帰りたくなった。しかし、非常なおっさんの一声がまたもや直己を苦しめる。

「次行ってみよう。」

「このエセいかりや……。」

もう返す言葉もないくらい、切れない突っ込みを直己は放った。

その後もバダ・ハリ、ペトロシアン、BJペン、ジョルジュ・サ

ンピエール、アンデウソン・シウバ、メイウエザー、全盛期のロイ・ジョーンズなどにサンドバックにされた直己。まさに終わることのない拷問を受けるに等しかった。しかしながら少しずつ、直己は強くなっていた。ちよつとやる気が出た頃合になって、おっさんは言った。

「もう、格闘技に用はない。」

すると突然、直己の目の前は真っ暗になった。

「また、ポケモンか……。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2666/>

---

ドリームジャーニー

2010年10月10日00時54分発行